

はじめに

近年では貧困による教育格差に注目が置かれている。親の貧困により子どもへの教育格差が生まれ、この格差が子どもの将来の健康や収入にも大きな影響を与えてしまっている。そのため、教育格差によって生まれた格差は次の世代へと引き継がれてしまう。これを改善するためには政府が介入し、貧困の家庭に現金給付や現物給付を行うことが大切となるが、この現金給付と現物給付はどちらのほうの方がより効果的で効率的なのかという議論も行われている。さらには、そもそもの問題として貧困の家庭に支援を行うことに対して賛成ではない立場の人もある。しかし、貧困家庭への支援を行うことは教育格差を改善するために必要不可欠なため賛成ではない立場の人と折り合いをつけていく必要があるが、この賛成ではない立場の人でも支援全てに賛成していないわけではなく、義務教育までの支援に対しては比較的肯定的な考えを見せている。そのため、まずは義務教育までの支援を充実させていくことが大切となる。上記で述べてきたことに対して、教育格差が本当に大きな差を子どもに与えてしまっているのか、ただ子どもの努力不足なのではないかという疑問を持つ人がいるかもしれない。しかし、アメリカで行われた「ペリー就学前プロジェクト」や「アベセダリアン・プロジェクト」によって幼少期に特別な教育を受けさせることで同じ環境で育った特別な教育を受けていない子どもと比べ、収入や健康に対して良い傾向が見られたことから教育格差は子どもから可能性を奪うことになることが証明されている(注 1)。このような事態が起きてしまわないようにするために、日本では義務教育の完全無償化という考えも出されているがこれは地域によって部活が強制であるところ、ないところ、さらに部活とクラブが一緒になっているところ、別々なところなど義務教育に含まれる範囲が違う場合があるため、どこまで完全に無償にするかの判断が難しい。そのため、この論文では国民の誰もが納得し、効果的かつ効果的な支援の落としどころを少しでも見つけられれば良いと考えている。

この論文は以下の構成となっている。本論の前半では教育格差の現状や問題点を詳しく述べる。後半では前半で提起した問題点をこれまでにどのような政策によって対処してきたのか、その政策にはどのような問題点があったのかを述べる。そして、結論では本論で述べたことを踏まえ、これから教育格差を改善していくために日本ではどのような政策を行っていくべきなのかを提言する。

1 章:日本の教育格差の現状

OECD(経済協力開発機構)の 2013 年の調査によると日本は家族が負担する教育費の割合が先進諸国の中で最も高い国の 1 つとされており、教育に占める公的資金の割合を見ると日本では OECD 平均の 83.6%よりも大幅に低い 70.2%となっている(注 2)。これは各家庭が負担しなくてはならない教育費が他の先進諸国と比べ格段に多いことを示す事実である。この教育費の中で大きい比重を占めているものは学校外の教育にかかる費用である。近年で小学校受験も一般的になっており、裕福な家庭に生まれた子どもは親の教育方針のもと公立の小学校よりも優れた私立の小学校を目指し入塾する。このような格差は勉強面にだけ該当するものではなく、スポーツ面にも該当するものである。よりスポーツで上を目指す

選手は幼児期からクラブに入るなどしてより良い環境で練習に励もうとする。そうした場合、貧困の家庭で生まれ育った子どもが中学校に入学し、各スポーツで上を目指そうとしてもすでにスタートラインが大きく違ってくる。このような場合、中学から各競技を始め、上を目指して頑張ろうと意気込んでいた選手のやる気を削いでしまう原因となる可能性を秘めている。もし、やる気を削いでしまいクラブ活動などの課外活動に対しての積極性を失ってしまった場合、大きな問題が生じる。「われらの子ども」という著作物において、不屈の精神やチームワーク、リーダーシップ、そして社交性といった非認知的スキルと習慣は課外活動の参加者の間で発達するものであると述べられており、課外活動によってこれらのスキルや習慣を習得することは教育達成と10年後の収入の説明要因としてハードスキルや公式の学校教育と同じくらい重要で、それは家族的背景を統制しても成り立つと記述されている(注3)。さらに問題なのは裕福な家庭に生まれ育った子どもは課外活動への参加率が上昇しているが、貧困の家庭で生まれ育った子どもは課外活動への参加率が減少してしまい格差が広がったと記述されていることだ。格差が広がってしまった原因の1つとして上記で述べたスタートラインで既に差ができてしまっていることがあるが、これだけでなくむしろ課外活動に積極的に参加し続けるうえでどうしても多くの費用がかかってしまうことが原因となっている。

2章：教育格差の問題を改善するために必要なこと

これらの問題を改善するには貧困家庭に支援をすることが必要不可欠であるが、支援する際に問題となってくるのが、どこまでが「必要最低限の教育費」かというものである。上記でも述べたが地域によって義務教育における部活やクラブ活動の範囲が違う場合がある。その際にある地域では部活とクラブの両方にかかる費用を支援するが部活もクラブも強制ではない地域ではどちらの費用も支援しないとした際に地域間で大きな格差が生まれてしまう。しかし、部活もクラブも強制でない地域の家庭にも同じ額支援した場合にその部活とクラブ活動のための支援を適切に利用してもらえるのかという問題も発生してしまう。また、上記で入塾し私立小学校に進学する子どもと入塾する余裕が家庭になく満足な教育を受けられないまま小学校、中学校を卒業し高校に進学できれば良いが中卒で社会に出る子どもとの間に大きな格差があると述べたがこれはとても複雑な問題である。私立の学校に通うための費用は「必要最低限の教育費」ではないと考える人が多くいることは予想される。確かに私立の学校に行くために入塾するための費用は必要最低限ではないかもしれないが、学校の教育だけでは授業についていくことができない子どもが入塾するための費用は必要最低限なのかという問題である。入塾しない場合、学力を十分に身に着けることができず中卒で社会に出る可能性があり、このようになった場合その子どもは正規労働者になることは難しく、低賃金の非正規労働者として働く可能性が非常に高くなる。しかし、入塾した場合十分な学力を身に着け公立の高校を進学し、さらには大学などに進学することができる可能性が広がる。このようになった場合入塾しなかった場合と比べ、子どもが生涯で稼ぐ給料は大幅に変化し、稼ぐ給料が増加した場合、将来その家庭に生まれてくる子どもに貧困が引き継がれる可能性が低くなる。このようになった場合、教育格差は多少ではあるが縮まる。これは全て可能性の話ではあるが良い方向に進む可能性は高い。そのため、最低限高校を卒業できるまでの支援は行うべきではあるが高校は義務教育ではないため、支援することに

対して国民が同意するののかという問題点があったが、この問題点は既に国民の過半数以上が同意しているため解決したものとする(注 4)。しかし、それでも高校を卒業するまでの支援を行う際の問題点は残っている。1つ目の問題点として中学校から高校に進学するための学習支援を現金給付にすることで入塾を促すのか、学校教育をさらに充実させることで入塾の必要性を減らすのかということである。現金給付の特徴は後程現物給付の特徴と同時に述べる。現金給付にした場合、貧困家庭に入塾のための費用を支援することになるため、裕福な家庭は支援の恩恵を受けることができない。そのため、このような政策を施行したとしても裕福な家庭からの支持が得られず、すぐに縮小または廃止となってしまう恐れがある。しかし、学校教育をさらに充実させる政策を行うにしても問題点はある。その問題点とは教員の過重労働である。現状でさえ教員は普段の通常授業に加え、部活動の顧問なども並行して行っているため過重労働となってしまう。このような現状を改善することなく、学校教育を今以上に充実させることは不可能である。そのため、どちらの政策を行うにしても問題点は存在してしまうが、施行できた際に半永久的に継続して行える政策は学校教育の充実である。次に大学に進学するための支援をどうするのかという問題点に直面する。現在の日本の大学進学に関する支援は奨学金であり、奨学金には給与型と貸与型があり貸与型には第一種、第二種、入学時特別増額の3種類がある。第一種は利息が発生しないが、他の2種類には発生する。このように大学進学に関する支援はほとんどの場合、最終的には自己負担なくとはいけないものである。しかし、この自己負担を改善することは現状では不可能である。国民の過半数が大学進学に関する支援にはあまり賛成的ではないため、この現状を改善しないことには改善の可能性はほとんどないが、そもそも大学進学にかかる費用は「必要最低限の教育費」という問題点がある(注 5)。以前までの日本であれば高卒であっても十分な年収があり、安定して家族を養うことができたかもしれない。しかし、現在の日本では大卒でなくては正規労働者になり十分な年収を稼ぎ、安定して家族を養うことは難しい。このように考えると「必要最低限の教育費」のボーダーも社会情勢によって変化させていかなくてはならないが、そのためには社会情勢を的確に見抜く力と国民の同意が無くてはならないため難しい問題点である。なぜ高校までの費用を支援することに過半数以上の同意を得られるが、大学進学に関する支援の同意がなかなか得られないかという疑問には大学進学が当たり前になったのがごく最近のためであり、大学進学の必要性が世間に伝わりきっていないという明確な回答が出てしまっているため、まずはこの状況を改善していかなくてはならない。

3章:日本で行われている政策とその問題点

上記で述べてきた問題点の大きな要因とされているものの1つとして親の所得格差がある。この所得格差を改善するために各国が所得の再分配を実地しているが、OECD諸国の中で日本だけ再分配前よりも再分配後のほうが所得格差が広がる逆転現象が起きてしまっており、貧困を削減するための政策であるはずの所得の再分配が子どもの貧困率を上昇させる結果となってしまった。この現象は2010年の時点では改善されたが、OECD諸国の中でなぜ日本だけ逆転現象が起きたのかという疑問が残る。このような事態を引き起こした原因として他の国と比べ、日本は貧困世帯に対する給付が小さいことが挙げられる(注 6)。しかし、小さいながらも2010年には逆転現象を克服したが、克服する際に日本の貧困世帯へ

の給付が他の国と同額程度になったわけではなく、2010年の再分配の度合いをユネスコの定義によって推計し直すとまだ逆転現象が続いている。上記の記述で逆転現象は解消されたと述べていたのになぜ逆転現象がまだ見られるのかという疑問が生まれるかもしれないが、それは日本の定義では再分配に含まれる公的年金がユネスコの定義では含まれないからだ。ユネスコでは公的年金は政府が人々の所得の一部を強制的に回収し、それを老後に年金として返却するものであるため含まれないと解釈しているが、日本の公的年金は回収した人々の所得の一部を返却するだけでなく、税金などの一般財源からの繰り入れも多くされているため含むと解釈している(注7)。そのため、日本の再分配の度合いはユネスコの定義で測ることはできないが、ユネスコの定義で見た際に示される結果は日本の再分配は公的年金を抜いて考えた場合いまだに逆転現象がおきており、その原因は上記で述べた通り貧困世帯への給付の小ささである。2009以前と比べれば確かに貧困世帯への給付は大きくなったのかもしれないが、いまだに給付は小さいため拡充されない限り所得の再分配が教育格差の原因となる子どもの貧困を改善するために大きな効果を発揮することはない。

また所得の再分配の際に言われていた給付が当てはまる現金給付以外にも現物給付といった貧困世帯を支援する政策が行われているが、どちらの給付の方法にもプラス面とマイナス面が存在してしまっている。現金給付のプラス面は効果が確実であることであり、給付される家庭がその時に一番必要なものに給付されたお金を使うことができることである。しかし、現金が給付されるため、各家庭が自由に給付されたお金を使うことができ、全ての親が子どものためにと正しく賢い判断が下せるとは限らないというマイナス面もある。このようなマイナス面もあるが、効果が100%現れる政策はなく、給付されたお金が親の私欲に使われたとしても、親のストレスは子どもの成長に大きな影響を与えるため私欲を満たせたことでストレスが軽減されたのであれば効果があったとみなすことができるため現金給付には効果があると言える。さらには、家庭における金銭的なストレスである「生活苦」や「家計の苦しさ」は現金給付でしか支援することができないため現金給付はとても大切なものである。次に現物給付のプラス面を見てみると各家庭が必要としているものは間違ふことなく給付できた際に現金給付以上の効果がある。しかし、給付の仕方や給付したものによってはまったく効果が得られないというマイナス面も存在している。このマイナス面がある限り、現物給付は現金給付と比べて効果を出しづらいのではと感じてしまうが、現物給付でしか支援できないことがある。それは主に教育や保育などの市場原理に任せてしまうと不利な状況にある子どもへのサービスの量と質が確保しづらいものに関する支援である。このようにこの2つの給付にはそれぞれの一長一短の特徴があるため、「現金給付 vs 現物給付」論争が存在しているが、各場面に応じてより効果的な給付を行っていくことが貧困による教育格差を改善するために必要なものである。

4章：学校教育から離脱してしまう子どもへの対処

上記では貧困による教育格差を改善するための金銭への支援について述べてきたが、金銭面だけが問題ではない。確かに金銭面による教育格差も大きな問題ではあるが、学校教育から各々の事情により離脱してしまう子どもは学校教育を受け続けた子どもと比べ十分な教育を受けることができている場合が多く就職した際に安定して十分な給料を得ることができず将来の子どもにも貧困による教育格差の影響を与えてしまうため、学校教育から

の離脱も貧困による教育格差の問題の 1 つである。学校教育から離脱してしまう生徒の一人一人が複雑な問題を抱えている場合が多い。生徒の問題を改善するためにはその問題を知るために教師は自ら聞くか生徒からの相談を待たなくてはならない。このようなことをすることなく教師が生徒の問題にいち早く気づくことができれば良いのだが、それは難しい。さらに、生徒にとって学校に関係している教師に相談することは必ずしも安心して行うことができるわけではないため、電話相談事業が存在している。しかし、この電話相談事業は生徒の話聞くだけの「傾聴」のみで終わってしまう場合も多く、そこからどのようにして改善していくかが問題である。また、学校教育から離脱してしまった生徒のための学習支援教室が存在している。学習支援教室が存在しているおかげで、勉強だけでなく学校教育で学ぶはずであった人とのコミュニケーションの取り方なども学ぶことができるためこの支援は学校教育から離脱してしまった生徒のためにも必ず必要となってくるものである。

そもそもなぜ学校教育から離脱してしまう生徒がいるのかという問題であるが、それは学校教育で少なからず生徒間での競争が求められるからではないだろうか。スポーツテストや期末テストでは自分の能力が数値化されてしまうため、嫌でも自分が周りと比べてできるのかできないのかが突き付けられてしまう。学校教育に競争は必要なのかという疑問に対し、意見は半々に分かれているが、過度な競争は絶対には必要ではない。競争することで生徒のモチベーションが上がることもあるが、逆になくなってしまう場合もある。そのため、必要となってくるものは競争ではなく協力である。協力であればできる生徒はできない生徒に教えることで自尊心が高められ、モチベーションの向上につながり、できない生徒もできる生徒に教わることでできなかったことができるようになり、モチベーションの向上につながる。また競争とは関係無しに学校という環境が合わずに学校教育から離脱していく生徒もいるが、義務教育過程の生徒は特に学校教育から離脱することで家庭以外の居場所を失うことになる場合が多い。さらに、家庭環境も悪かった場合居場所が完全なくなる場合もある。そのため学校教育から離脱した場合でも居場所になる場所があることを生徒に伝えるためにも今以上に学習支援教室の存在を広めていくことが重要となってくる。そして、居場所を失ってしまった生徒も学習支援教室で居場所を見つけ、勉強に励むことができれば学校教育に通い続けた生徒との教育格差を縮めることができる。

また、学習支援教室以外にも近年で急速に増加した子ども食堂という支援が子どもの居場所となりつつある。子ども食堂とはボランティアの有志の方々が集まり、月に数回子どもからお年寄りまでの幅広い世代を対象として食事をふるまう活動である。ボランティアの方々が開催しているため月に数回行うことが限界である場合が多いため、世間一般に思われがちな貧困の子どもへの食事補助という役割は果たすことができないが、ボランティアの方々はこれとは違った目標を持って開催している。その目標とは来てくださる全ての人への場所の提供である。親が共働きで孤食になってしまう子どもも子ども食堂に行けばみんなと楽しく食べられると食事が楽しみになる。さらに、大人であっても独身であったり、お年寄りになり 1 人になってしまった場合、食事が疎かになりがちであるが子ども食堂に来ることでしっかりとした食事をすることができる。そのため、家にいても一緒に食事する人いないし、暇だからという理由で夜に外を歩き回る子どもを減らすことにつながる。また、大人もしっかりとした食事をすることで活力が湧き良い仕事ができるようになり、所得が安定する可能性もある。さらに、子ども食堂で子どもが大人と関わることで自分のロールモ

デルを見つけることができ、さらに自分を見てくれている大人がいることに気づき自尊心を高めることにつながる可能性が高い。食事だけでなく、勉強の支援を行う子ども食堂や家庭が貧困のためサッカークラブに入ることができない子どものためのサッカー教室を子ども食堂と他のボランティアの方々が連携して食事付きで開催しているところもある。親が共働きなどでなかなか家にいない場合、宿題をやれなどと口うるさく言う人がいないため子どもは勉強をまったくやらない可能性が出てしまうが、子ども食堂に行くことで楽しく食事ができるだけでなく勉強をするきっかけを与えてくれる場所となるため教育格差の改善にもつながる。さらに、子ども食堂と連携してサッカー教室が開催されることが上記で述べた中学に入学し、いざ部活に入部した際にすでにスタートラインに差があるという状況を完全に解消することは不可能ではあるが、多少は改善することができる。また、学習支援教室や子ども食堂がこれからの居場所は多様化していく必要があり、子どもにとっての居場所が学校だけでは足りない場合があることを示しているように感じる。学校以外に多様化した居場所ができていけば、時間を持て余し非行に走ってしまう子どもが減るため、勉学に励み大学に進学し安定した所得を将来的に得る子どもが増える。そのため、子ども食堂は子どもの居場所になるだけでなく、貧困による教育格差を改善することに大きな貢献をしている。

おわりに

上記までに述べてきたことから貧困による教育格差の原因は金銭面だけではなく、居場所があるかないかも関係があることがわかったが、やはり金銭面は大きな問題である。そのため、現物給付も大切であるが、より現金給付を充実させることが重要である。確かに現物給付でないと教育や保育に対しては十分な支援はできないが、特に教育面に対する支援は現状ですでに教師が手一杯であるため、すぐに拡充することは現実的に考えると難しいためまずは現金給付を拡充する必要がある。このように述べると現金給付を拡充することは簡単のように感じてしまうかもしれないが、現金給付を拡充することも難しい。今以上に現金給付を増やす場合、国民の同意が必要となってくる。しかし、年々親の経済力の差による子どもの教育格差は仕方がないという考え方が増加してしまっている。そのため、始めに国民の意識改革から行う必要がある。年々増加していることから若者がこのような考え方の傾向があるということである可能性があり、その原因として近年の若者は自分の周辺にしか興味がなく、他者への関心を持たないようになってきてしまっていることがある。このようになってしまったのは若者が社会に対して絶望もないが期待もできないものになってしまったことや人間関係で対立しないために SNS を駆使する若者が増加し、その影響か豊かな人間関係への期待を喪失し、常に人間関係への不安を抱き続けるようになってしまったことが影響している。これは SNS が普及したことによって人間関係が以前と比べて多様化し複雑になってしまったことや努力してもなかなか正規労働者になることができない場合があるなど雇用状態が悪化したことが要因である。そのため、人間関係を簡略化することは不可能に近いが、上記で述べたように居場所を多様化させることでそれぞれに合った居場所をつくれれば人間関係への期待を持てるようになる。さらに雇用状態の改善も上記で述べた学習支援教室や子ども食堂での学習支援を推し進めていくことで学校教育から離脱してしまった子どもでも教育に格差がつきづらくなり、大学進学する割合が高くなることで

正規雇用として就職することができる人が増加するため社会に希望を持つことができるようになる。これらのことを行った場合、若者の自分の周辺にしか興味がなく、他者への関心を持たないという考え方を改善することができるため、親の経済力の差による子どもの教育格差は仕方がないという考え方も改善される。そのため、現金給付を拡充することが可能になり、貧困による教育格差を改善することができるようになる。

上記で部活やクラブで不屈の精神やチームワーク、リーダーシップ、そして社交性といった非認知的スキルと習慣を学ぶ必要性があるが、各々の競技のスタートラインに立った時点で差があることがやる気を削いでしまい、積極的に部活やクラブに参加しなくなってしまうと記述し、その改善策として子ども食堂と他のボランティアの方々が連携して開催しているサッカー教室が効果的であると述べていたが、ボランティアの方々だけで開催している限り半永久的に開催することは難しい。そのため、継続させていくためには行政や企業が介入し、ボランティアの方々とバックアップしていく必要がある。このようにした場合スタート地点に立った際の差が縮まるため、中学に入学する前にクラブに入って各競技の練習をできなかった子どもも中学の部活やクラブに積極的に参加するようになる。そのため、部活やクラブで学ぶ必要のある不屈の精神やチームワーク、リーダーシップ、そして社交性といった非認知的スキルと習慣を今までよりも多くの子どもが学ぶことができるため、社会に出た後も困難な仕事に対しても立ち向かうことができ、さらに多くの人と上手く関わることができ、潤滑に仕事を行うことができるため、安定した所得を得ることができるようになる。そのため、将来の子どもに貧困による教育格差を引き継ぐことを無くすことができる可能性を秘めたボランティアの方々によるサッカー教室に政府や企業が介入し、バックアップしていくことがとても重要となる。


ここまで貧困による教育格差を改善していくためには何が重要であるかを述べてきたが、これらは全て持続してこそ意味のあるものである。そのため、若者が中心となり活動していくことが重要となる。現在筆者は学生であるため活動できることは限られてしまうが、現状で行えることを考え行動を起こしていきたい。また、このレポートでは貧困により高校進学をする場合に支援を受けなくてはいけない子どもが私立の高校に進学したい場合、どのようにしてどこまで支援するのかという問題点に触れ改善策を提示することができなかった。そのため、これからこの問題点をどのようにして改善していくのかを考えていきたい。

参考文献・参考資料

- ・「命の格差は止められるか～ハーバード日本人教授の、世界が注目する授業～」
小学校館新書 2013年8月5日出版 イチロー・カワチ
 - ・基調講演「子どもの貧困と居場所づくり」青砥恭
 - ・「子どもの貧困Ⅱ-解決策を考える」
岩波新書 2014年1月21日出版 阿部彩
 - ・「われらの子ども～米国における機会格差の拡大」
創元社 2017年3月27日 ロバート・D・パットナム
- 注1: 「命の格差は止められるか～ハーバード日本人教授の、世界が注目する授業～」
P82～P83
- 注2: 「子どもの貧困Ⅱ-解決策を考える」 P189

- 注 3: 「われらの子ども～米国における機会格差の拡大」 P199
注 4: 「われらの子ども～米国における機会格差の拡大」 P194
注 5: 「われらの子ども～米国における機会格差の拡大」 P195
注 6: 「われらの子ども～米国における機会格差の拡大」 P152～P154
注 7: 「われらの子ども～米国における機会格差の拡大」 P154


池田ことな食堂

1. 子ども食堂紹介	
<p>場所：池田公民館)</p> <p>代表：宮地さん</p> <p>初回：2017年6月30日</p> <p>参加日時：2018年6月29日（金）</p> <p>参加費：子ども100円・大人300円</p> <p>参加人数：大人・子ども合わせて30~50人程度、スタッフは25人ほど</p> <p>献立：カレーライス、サラダ、飲むヨーグルト、フルーツゼリー、</p> <p>参加・記録者：奥野貴大</p>	
2. 当日の流れ	
<p>14：00～ 会場設営</p> <p>15：00～ 調理開始</p> <p>16：00～ 会場</p> <p>17：30～ 料理提供</p> <p>18：15～ ご当地ヒーローのパフォーマンス</p> <p>19：00～ ラストオーダー</p> <p>19：30～ 終了</p>	
3. 食材、献立	
<p>① 食材 スタッフの中に農家さんがいるため、その農家さんから売り物にならないものを頂く。セカンドハーベスト名古屋からの提供を受けている。足りない肉、魚、調味料は会費で購入する。</p> <p>② 献立 毎月2週間前に提供できる食材が献立を考えるスタッフに連絡され、その後1週間前ごろまでに献立を決めている。</p>	
4. 課題・思い	
<p>初めは農家を営んでいるスタッフの出荷ができない野菜を畑の肥料にすることはもったいないという考えのもと始まった。現在ではお客さんだけでなく、スタッフも含めた全ての人の居場所になって欲しいという思いで開かれている。</p> <p>今後は元教師が何人もいることを活かし、学習支援にも力を入れたいと考えている。また、診療所や保健所ともつながって衛生面や健康面の安全性も高めていきたいと考えている。</p>	
5. 感想	
<p>最初調理場に案内され、調理系のスタッフさんに紹介されたときは仲のいい人の集まりという感じがして正直入りづらかった。しかし、受付が落ち着いた後、調理場で盛り付けの手伝いをした時にはやさしく受け入れてくださり、あまりやりづらさは感じなかった。また、子どもやその親だけでなくお年寄りだけのグループも参加しており、地域に愛された子ども食堂であると感じた。</p>	


はらぺこ食堂

<p>1. 子ども食堂紹介</p> <p>場所：てとりんハウス 初回：2016年3月開始 参加日時：2018年7月20日（金） 参加費：子ども無料・大人最低500円からの寄付金(500円以上寄付して下さる人もいる) 参加人数：大人・子ども合わせて24人程度、スタッフは5人ほど 献立：カレーライス、サラダ、かぼちやの煮物、バナナ、メロン 参加・記録者：奥野貴大</p>	
<p>2. 当日の流れ</p>	
<p>16:30～ 集合次第調理開始 18:00～ 開場 19:00～ ラストオーダー 19:30～ 片づけ 20:00 解散</p>	
<p>3. 食材、献立</p>	
<p>① 食材 春日井に農家が多いため野菜は寄付してもらえる。余った野菜は安くスタッフが買い取り、そのお金を次の資金源にする。肉や魚は購入している。フードバンクは利用していない。</p> <p>② 献立 当日野菜が寄付されるまで何が頂けるかわからないためサラダなどは当日見て決める。メインは前日までに決めておく。</p>	
<p>4. 課題・思い</p>	
<p>貧困に縛らず幅広く活動していきたい。現在は常連さんばかりなので新規のお客さんを増やしていきたい。科学のおじさんという人も来てくださっているの、この人とも協力して地域活性化につなげたい。</p>	
<p>5. 感想</p>	
<p>思っていたよりも小さい会場で行われていて驚いた。ここ最近は多くの方が訪れてくれていたらしいが、私が行った日はあまりこなかったため普段の様子を見ることができなかった。また、私たち以外にも途中から男子学生がボランティアに来ていた。場所が車などの交通手段がないと来づらい場所であるため、子供だけで来ることは難しいが今以上に人を増やしていきたいと感じた。</p>	

心の子どもごはん

<p>1. 子ども食堂紹介</p> <p>場所：KUMON 教室 1階 喰い処「心」 (守山区小幡南 2-5-34)</p> <p>代表：中村さん</p> <p>初回：2016年9月</p> <p>参加日時：2018年12月1日(土)</p> <p>参加費：幼児 無料・小・中学生 100円 高校生・大人 300円</p> <p>参加人数：幼児～大人まで含め54人、ボランティア15人ほど</p> <p>献立：煮込みハンバーグ、ハム、ソーセージ、ベーコン、野菜の付け合わせ、里芋と大根の味噌汁、大学芋、柿、ミカン</p> <p>参加・記録者：奥野貴大</p>	
<p>2. 当日の流れ</p>	
<p>17:30～ ボランティア集合</p> <p>18:00～ 前半の参加者の食事開始</p> <p>19:00～ 後半の参加者の食事開始</p> <p>20:00～ 片付け開始</p> <p>20:30～ スタッフ・ボランティアの食事開始</p> <p>21:00～ 残りの片付け</p> <p>21:30～ 解散</p>	
<p>3. 食材、献立</p>	
<p>Facebookの影響で各地から米が寄付されている。また、早い者勝ちではあるが子ども食堂ネットワークからいろいろな食材をもらっている。さらに、子ども食堂を始めるときに市議会議員に会いに行き、その時に紹介してもらえた農家や企業とのつながりで農家からは野菜、スーパーからは肉や魚をもらえる。それだけでなく、ホームページからも寄付のお願いをしている。</p>	
<p>4. 課題・思い</p>	
<p>10年など長く続けていきたい。その中で子どもの成長を感じられたらうれしい。</p>	
<p>5. 感想</p>	
<p>確実に来ていただいた人にご飯を食べて帰ってもらうために予約制にして前後半に分けて運営しているのを知ってびっくりした。来てくださった人の中には別の子ども食堂にも行ったことがあるが、そこは人が多くて食べられなかったと話している人もいたため予約制は良いシステムであると思った。</p>	

心の子どもごはん

<p>1. 子ども食堂紹介</p> <p>場所：KUMON 教室 1 階 喰い処「心」 (守山区小幡南 2-5-34)</p> <p>代表：中村さん</p> <p>初回：2016 年 9 月</p> <p>参加日時：2018 年 12 月 15 日 (土)</p> <p>参加費：幼児 無料・小・中学生 100 円 高校生・大人 300 円</p> <p>参加人数：幼児～大人まで含め 44 人、ボランティア 10 人ほど</p> <p>献立：チキンカレー、フラワーサラダ、ゴボウの和え物、オレンジ、リンゴ、ケーキ</p> <p>参加・記録者：奥野貴大</p>	
<p>2. 当日の流れ</p>	
<p>17：30～ ボランティア集合</p> <p>17：50～ 前半の参加者の食事開始</p> <p>19：00～ 後半の参加者の食事開始</p> <p>20：10～ 片付け開始</p> <p>20：30～ スタッフ・ボランティアの食事開始</p> <p>21：00～ 残りの片付け</p> <p>21：30～ 解散</p>	
<p>3. 食材、献立</p>	
<p>Facebook の影響で各地から米が寄付されている。また、早い者勝ちではあるが子ども食堂ネットワークからいろいろな食材をもらっている。さらに、子ども食堂を始めるときに市議会議員に会いに行き、その時に紹介してもらえた農家や企業とのつながりで農家からは野菜、スーパーからは肉や魚をもらえる。それだけでなく、ホームページからも寄付のお願いをしている。</p>	
<p>4. 課題・思い</p>	
<p>10 年など長く続けていきたい。その中で子どもの成長を感じられたらうれしい。</p>	
<p>5. 感想</p>	
<p>1 家族につき 1 つのケーキが用意されているだけでなく、その持ち帰れるケーキを自分で生クリームを使ってデコレーションし、フルーツをトッピングできるようにすることで子どもが楽しめるような工夫がされていて驚いた。子どもがケーキを作るため普段よりも 1 家族の滞在時間が長くなることを予想し、普段は前後半各 60 分のところを各 70 分とるようにして対策されていてよく考えられているなど感じた。</p>	